

183
2
238

東 京 圖 書 館

和書門

櫻詩類

三四函

七架

六八號

二冊

櫻詩類
二冊



白隱
禪師假

名律坤ノ巻

迂談義

白隱和尚述

妄相生如乃日禱ハ生死長物ヲ聞

照一牛有為任の月禱ハ無明煩

惱乃をを辨ふ勇猛ハ流生の為

成佛一急ハあり情急ハの流生ハ乃為

申

八段盤三紙の流しをしく海にも
 云ひ合せしるハ大勢よふんらぬを
 奇特くおぼゆるよ及ぬるを
 去とてハ大切の村をあらざるも推し
 生死も来と塵の四里やちる海つ
 徳焼熱馬繩を今おぼゆる大おぼゆるの登

西へ逃ひ居るれくききし懐沙の昔思き
 受る事ハまはあつちるぞやおひ様
 まで油のそらぐらふふふに由実
 おしらぬの目移ハ生死を秋の園を照了
 昔ハ昔禁庭不始ゆらて内交物使
 立て神意を言知しせたまひる村おくの矢

照^テりて大^大至^至神^神君^君一^一口^口白^白の偶^偶を以^以下^下言^言
 へまを玉^玉ひりりる神^神勅^勅た^たは射^射少^少を神^神
 とまひ併^併ひ以^以至^至ま^まの波^波の海^海の
 初^初めくち^ち知^知れ^れる^るもやま^ま極^極ふ十^十力^力調^調
 御^御のめ来^来の旁^旁程^程の生^生のめ^めの成^成
 併^併一^一急^急ふ^ふあり^{あり}極^極意^意の^の生^生の^のめ^めの^の入^入理^理

繁^繁之^之祇^祇よ^よわ^わると^と從^從ま^まう^うせ^せま^ま不^不作^作摩^摩登^登
 う^う是^是に^に良^良成^成佛^佛れ^れ一^一急^急と^とあ^あう^うは^は唯^唯是^是を^を
 極^極意^意の^の一^一割^割那^那あ^あう^うの^の極^極意^意行^行え^え
 生^生は^は惟^惟ま^まあ^あも^も人^人も^も偶^偶く^くあ^あう^うに^に
 人^人を^をと^とあ^あう^うは^は併^併ひ^ひな^なの^の併^併ひ^ひを^をあ^あう^うに^に
 愛^愛の^のあ^あう^うは^は一^一年^年の^の百^百年^年の^の生^生を^をあ^あう^うに^に

も浮世の影ひやも菩提の求む根も
空にそのを邪見無智の人とせし
彼も量地獄なるといふ根も其を
とあるがやせ泥持の閑閑の影
路も一人も地獄なるといふ根も
路も持又二つ根なるといふ根も

地獄と量地獄なるを現地獄なるが根
とておぼしむるの存作しむる根
ある人の殺さむ火の付て地獄なる
種はそなたの根も又存あるの根
地獄あるがそれとせむ根なるが
人並にありておぼしむる根

幸は目をもとせよか〜人首は其の事
 様の箭は岩屋の目籠より人の首〜なる
 らく奈後の夜は沈てハ判別的首陀の
 者〜つらと縁〜たせよ〜の事今
 月のあつりあるもや〜も〜も
 言はぬ地獄後由代有角も産屋も名

ぬ〜も〜種火は産〜と後
 叫〜中〜も〜沙門〜方袍の足
 法師あ〜の在俗の人〜に者〜
 と〜前合〜繩〜の産〜を
 志〜中〜も〜も〜の傍〜河
 周樂よ〜も〜大音〜識〜は

身を控へ命にたつて世に
道一ありバ願ふ世に
たなれをてやまを初は
入つて一母の世に
くはくは世に
おれもあはせ
おはせの

あつたあから昔一
ありたあへり
まもを多し
あひるゆい
あつて
の沙門法師

申

〇

能く見せば彼沙門法師亦も好まぬは
華初り澄ハギリルホホクた念ひもなき言
位言友の僧侶密衣ぬ衣の美僧言僧
在の華俗の在衆よ少も劣らせたまふて
獄卒にまにかつて空に其花の由り
を遙にんきは人にも初らむと高知り玉ハ

夢にたそそ免ゆる角よせん方夢は
衆くが今乃おれの果たむ花やたむ
ろもふ夢も怖す泣叫むハ玉の崩落へ
くさそ覚えしとは彼の止観疎林十王經
おどに説宣益せよ大畏あるを今
よ油貯しよめて油以煮あふんは押

申
〇上

一 法華愛目を認めよ 及まきを良薬
 はほふ 若く忠言は身不遂と申せば
 為常一の極楽地といふ面白は是こと
 なるごとく大地打をうづまよの遠ひあは
 お修あるごとく

村小融在平一人あり 謙座君をくを

おてあ難や美か家者 回るやある猶縁
 やかると不思の務舎ふさし 未嘗あは
 乃不説を承るるも 有難き事也
 澆季末代の有るひ 初なるは 初養の部
 傳のぬまきも 案の極楽地をのこ
 くる来世八ら 易き事よのこ 是て 毎日 障りも

家出死業を積ずぬく徳もあつくもの三
 色の四里入立海く無量劫を経て果
 てもあまき若意をこころす子ハ流知ぞ積
 提の孝子の善行をあくがあく牛羊大象の屠
 殺あるふあく億は日く衣食をの味て
 作定る果もあく徳も人もやくと交

籠き人身を失ふ子飛浮の名七のあく
 小う知く也大元枝業千列の百福を徳
 業博多の浦東々都賀留合浦の果て
 業も回舎も押さては徳の新まて併ふな
 りは佛の徳より流せふ生る一唱法陀
 号良滅をさるとくく不飛ハ何不ど

何事ても消易きものを何程放逸中
 著ても佛より成りて現世の事とん坊て心
 よ伊せて飛業成續まて何の事にも
 るく月日を送く其の術も皆そく
 無事小陸する世の中に出来る事乃
 清浄の事とて大なる事とて儼然
 睡

後の事とてうごき去りて作は候まて
 玉玉り河を便する生家限りも其記
 隙を減し果しも其記無能を免る事
 何んたてんむ人の物の生子を教て云く
 業智く勵む何んぞ者く其業を勤
 めよ父事の中たれ油即しんハ末

よハ必^{まさ}矣^す困^{いん}不^{こん}若^る一^る免^るら^るむ^て幸^きを^目目^め成^じ
 見^みる^べき^きお^おか^かし^しく^く油^{あぶら}貯^{たくわ}え^るる^るな
 ら^られ^れと^と種^{たね}く^く敷^きく^く縁^{ゆかり}せん^んよ^よ其^{その}物^{もの}益^{えき}く^く
 畜^{ちく}畜^{ちく}を^を勤^こむ^むべ^べき^き子^こま^まら^ら寫^やし^しく^く金^{かね}銀^{ぎん}
 乃^{すなは}本^{ほん}手^てを^を後^ご一^一農^{のう}業^{ぎやう}を^を勤^こむ^むる^るを^を
 よ^よハ膏^{かう}腴^ゆの^の田^た畑^{がき}を^を讓^{ゆづ}り^りて^て入^いる^る一^一而^{いつ}後^ごよ^よ

你^{なん}等^ら為^なす^す不^ふ願^{げん}一^一つ^つと^とめ^めよ^よ油^{あぶら}貯^{たくわ}え^るる^るを^を
 此^{こゝ}と^と云^いふ^ふ路^ぢを^を扱^あひ^ひく^く今^{いま}不^ふ得^とく^くらん
 若^し本^{ほん}手^てを^をあ^あて^て一^一田^た畑^{がき}貯^{たくわ}え^るる^るに
 農^{のう}を^を勤^こむ^むよ^よ畜^{ちく}を^を勤^こめ^めと^と云^いふ^ふん^んよ^よ其^{その}こ^こあ^あ不^ふ
 を^を使^{つか}ひ^ひて^て一^一く^く農^{のう}畜^{ちく}貯^{たくわ}え^るる^るを^を解^とか^かす^す
 業^{ぎやう}不^ふ勤^こ一^一物^{もの}を^を油^{あぶら}貯^{たくわ}え^るる^るを^を勤^こむ^むる^るを^を此^{こゝ}
 申^{まを}

酒^ウ乃^ダ一^ニた^タん^ン久^ク死^シ後^ゴハ^ニ必^キ無^ク所^ス不^レ壊^ス
 す^ズま^ニそ^ト最^クも^ハハ^レお^シま^シる^ニ今^キ迄^ノ本^ノ
 手^デ乃^ダあ^リて^ハ本^ノ田^ノ畑^ノに^テ僅^クに^ハ只^ニ家^ノ業^ヲ
 を^シお^しよ^ウ酒^ヲ乃^ダを^シす^マと^モあ^リま^シる^ニ物^ノ
 如^シく^ハ我^ガ輩^トも^ハ又^モ方^ノの^トど^シ何^レの^ノ
 道^ヲを^シゆ^ウ一^ニめ^ニあ^リる^ニ皆^クを^シ行^フド^シく^レ

酒^ウ乃^ダあ^リて^ハ初^メに^ハ物^ヲを^シて^ハ未^ラ未^ラを^シ物^ヲ
 一^ニや^ハ影^ヲを^シ来^ル世^ヲを^シ助^ケる^ニ道^ヲ一^ニを^シ
 を^シ精^ク一^ニく^レあ^リま^シる^ニ彼^ノ心^ヲ一^ニを^シ無^ク
 業^ヲを^シ救^ヒひ^て脚^ヲけ^てま^しひ^てよ^ク懸^つく^ニ願^ふ不^レ
 世^ヲ百^ニ一^ノ切^ノの^ノ出^立家^ノ沙^ヲ門^ヲを^シ称^す一^ニを^シ弘^く法^ヲ
 信^んの^ノ三^ノ宝^ノの^ノ一^ノ教^ヲあ^リて^ハ福^ヲ命^ヲ一^ニを^シる^ニ

信する子ハ其ノ無量ノ法財を積
 貯へ給めて大施施を行はして一切を
 利益し一も亦た有り衆も人も罪も
 報も當く知らず死して三途不墜す
 子も又知らず給も赤子の如く
 井よ給くん不盲者三四人牛を侍ふを

しくども愛おも有りて知れぬ
 ふゆくるん無量とて末代の出
 つも又さうして因果報道も有りて知れ
 三途も六條もあらく辨たれん
 さあがし盲者の赤子を救ふん
 一和尚大慈大悲に
 一を儀

一玉へ予が曰く善哉同くお披露
て油取し玉ひそ油取し玉ひそ油が
あつて三海子あつてあつてあつて
ひきてあつてあつてあつてあつて
執くあつてあつてあつてあつて
井おあつてあつてあつてあつて

くがあつてあつてあつてあつて
成仙の秘訣あり眉毛を惜まぬ
傳世せん徳んで精神を凝らす
おあつてあつてあつてあつて
骸男女あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

憎悪妬害瞋吝執着重苦務のあり
濁かかく波流の漲形よかか三毒懐
は浸進五欲胸よ凝了日く多少の悪業
習を積ま子に空教よ空報小帰也
死してかかぶ三途は深きす何咄念合思
繩無方の大苦甚一処小毒の妻む三祇

百劫成種々休羅馬るるのあり
苦心色言義も及ぶべし佛のまじ
一切地獄の所生の苦甚甚を
是を脱うべ周深授の所生空法く皆
是く血成吐しし死すべし
るべく是は性べし
ある人女三途の若

城を透過し八冠の嶮を越え
一都の草木は直ぐ温帯の大徳者
小島んと欲せむ清んぐ精を精り心
を凝らして你が御精氣海丹田の
點接せよ金く男女のおあぐ、信信の飛
多し老初る都灸男婿一匙の痕

海は〜是彼美成子か云りゆるおたの
精香く冥〜りおたの極盛く
る老あう〜におわく草〜に點接
し子細く無極〜く益おふ〜り
ハハ〜魚魚〜魚魚〜魚魚〜
玉盤を擲推し氷橋を推信すん

舟より舟に身をたすおとせんはまお
 めく情進んで運うざる別ふ斗らば
 一旦豁然として貫通して十方を
 空しく大地寸土あらずる物の表
 裏精産空きほりし中無ん是彼永
 平の情を身心脱離を身心出外気

古人の習はる理を以て是を以て格も
 まく空する。周令徳を静也能を
 脱する處の好村節隻身の交を以て
 くる白雲ふきよとをんるがごと
 長河を掬ひく藤路と成し荆棘
 を変志く梅檀林と成し穢を晴し

て今も成り成りの時最人習天上の善
 果是心也凡縁ひ你業戸候の富美を
 以るも黄梁一炊半熟の爰富四海を係
 つも死生是バカあり凡縁きて無難
 入る是存尔言ふ富ハ是一生の徳財減
 是を良縁とて減を智ハ是業代の宝命

終まハ凡縁つゝ行大凡世習一切は
 の有情五候より庶人ふあり老初早
 僧俗男女馬牛犬豕豺狼麋鹿又別
 まぐ正同佛性の大事を具足せんと
 ありてありて是を美お志心の日端と
 名づき本あり常恒の月端といふ是を美

する刻ハる銀海巴の若成生流將考
 後の礼史となり忽然として是を以る
 刻ハる今上正光を裁して三昇無此の
 大業と成る十司調所のゆ衆と因ド此
 等のナるをせぬしめ志をんごふ此の
 小人を勤めて是を其の傲好をを以て

うーむ是彼山姥がいらぬ一丁を
 谷の峯を無生書を書き使つてある
 是此の復生のありをいへるは是
 あはまゝく其を其を其あはれあり

ま心おほく影る

あがひぞや天の思あまのし

松と雪のなほさぬまつとゆき

る露のほそくるつゆ

君のほそくきみ

舞の光まゆのひかり

あつたはまのあつたはま

むのむの

はまのはまの

街がわやのまちがわや

風小葉のかぜのこは

つばねつばね

親のおや

孝行かうぎやう

人ひと

忠ちゆう

身み

をを

君きみ

親おや

主しゆ

かか

主しゆ

申

申

武蔵武徳の才のよし

主心なほまじの徳の固

周の文武の才のよし

武家の大事の略のよし

武士のまじの徳のよし

弓矢の西の希のよし

主心なほまじの徳のよし

執理を人のよし

ちかてなほまじの徳のよし

警悪を人のよし

主心なほまじの徳のよし

陰謀を人のよし

彼ははまを欺く

主心なほまじの徳のよし

主心なほまじの徳のよし

才の大和の才のよし

武士の徳の才のよし

多量の徳の才のよし

才の西の才のよし

主心なほまじの徳のよし

主の才の才のよし

主心なほまじの徳のよし

主心正しき事なれば

持身持戒の事なれば

有難い事なれば

方刀や海の子もたぬ

弓も矢も射ぬ

款とよまひの事なれば

空も月も海もなれば

七や八や九の事なれば

神も人も心もなれば

五款三毒の事なれば

民も物も心もなれば

一せんまの事なれば

お家沙門も言はれぬ

主人なれば言はれぬ

文も心も言はれぬ

主心一つが言はれぬ

上下業民も言はれぬ

治されぬ事なれば

婿も目も言はれぬ

うらぬ事なれば

将軍も言はれぬ

主人も言はれぬ

お家も言はれぬ

主人も言はれぬ

仁玉西玉にぎひ さいぎめめいんんののりりんん

主人しゅじんののりりんん

主心しゅしん丹田たんでん氣海きかいののりりんん

仙家せんか長壽ちやうじゆのの丹たん系けいののりりんん

丹たんをを煉れん又また煇けいをを合あららぬ

元げん氣き丹たん回わい子し形けいののりりんん

不死ふしのの丹たん系けいをを合あららぬ

活かつ子しのの氣き海かいののりりんん

意いをを界かいののりりんん

氣海きかい丹たん回わい子しののりりんん

氣海きかい丹たん回わい子しののりりんん

口くち口くち病びやうののりりんん

主人しゅじんののりりんん

わいわいののりりんん

意いをを界かいののりりんん

丹たん回わい子しののりりんん

山河せがわ大地だいちをを我われののりりんん

わいわいののりりんん

武士ぶしののりりんん

生なまてて一いつにに死しぬぬののりりんん

生なまてて死しぬぬののりりんん

主人しゅじんののりりんん

主しゅののりりんん

生なまてて死しぬぬののりりんん

武士ハ情滴々其の二ツ

一度主君ホ其の

身才なきも自由其の

大なりくも奇り其の

内徳つま合侍其の

物とよき後其の

主の為なる其の

依居も其の

命取らば切はむ其の

是か勇士の其の

ま心おぼめく其の

言海丹田の裏に

氣海丹田の

脈の通り二町下

梅のうら氣を

いりの木よぬ大

室も美を還丹の徳ハ

須弥も其の

十方は異其お

見られても其の

生死涅槃も其の

知悩菩提の

陰して其の

生じて其の

此一期の夫るがさき

先正の悟の知識は遠く

世多しの修は其が

三十二年経行若行

おひ斗はは場ふま

ももつて大障あり

おひ斗はは場ふま

殺生偷盗も氣をなす

五逆十惡好いなく

因果もつてもあが

邪見邪念の家修修

かそのつてあつて

勵みぬ見性の法

いま地獄の境となる

おのま心若諸を

魔縁天狗が入る

るまの縁因つた

修する心の明解

後後の修の果

もと先史が自増

今流末法滅の時

邪見邪念の起るも

支竺授業の二國も

生の縁宗地は果

並ひ腫るを指すは

大勢並んで槽を推す

めりたりゆきの果せん

佛法破滅の大前表よ

悟後の悟行の極まりぞ

おどろきてあうまを

是の矢子をばるるよ

わ百の業をばるる

後善知識の知ぬま

悟後の大りの善提

昔春日の大井君の

解脱よふ法者ぞ

凡俱は孫佛より

たよ天下の智者僧

菩提心なるは

菩提心なるは

山まは波女家

上果菩提と下は

口への新編

人を物する業を

人を物するや

法は業のよ

有るは

たよ佛にも

鯉魚も乾門万重を越

流石祥雲の如く

誅山壽塔五稜を建

白雲系在す南泉遷化

是を法卷の凡牙名づ

は等速一遠るの法

聖瓶も猶存を并て

実況をまよふを

乾雲三種を摩牛の

傳女誰免又は

又ハ棄余の神符も

度々内曲亦世を

三ツの根柢の如く

三ツの根柢の中へ

此の種子なる実類

是の青羽を挟む

是が即佛樹の

たより

三ツの根柢を救

此の種子深求る

法卷の牙と棄余の

是が其れハ種子

やうの

こ

183
2
288

明治十七年六月十八日出版御届
明治十七年七月十七日出板發兌

編輯人

清水三五居士

愛知縣平民

名古屋屋敷松入町四十六番邸

全平民

出板人

三浦兼助

名古屋區門前町二十番邸

定價二十五錢

白隱 假名 葎 坤ノ 卷終

新入が子業の後
波女が人を解くを完せ
仲介するおぼろげなこれ

おぼろげなおぼろげな
おぼろげなおぼろげな
おぼろげなおぼろげな

